



TITLE:

<報告>寺松教授の新任にあたって

AUTHOR(S):

辻, 周介

CITATION:

辻, 周介. <報告>寺松教授の新任にあたって. 京都大学結核胸部疾患研究所紀要 1972, 5(1): 86-86

ISSUE DATE:

1972-01-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/52322>

RIGHT:

寺 松 教 授 の 新 任 に あ た っ て

辻 周 介

長石教授定年退職後の後任教授の選考に関し、昭和45年10月8日の全教官の集いで協議した結果、ほぼ全員一致して肺外科の専門家を選ぶことに決定した。選考委員としては、辻、前川、上坂、池田、甲斐の五氏が選ばれた。11月21日の選考委員会では、各委員の推せんによって六人の候補者の名があがり、辻委員長より夫々の候補者に対し審査資料の提出を求めた。其后推せんを辞退される候補者があり結局四人の方の資料が回覧された。昭和46年1月28日の最終委員会でも、委員会としての順位づけなどは行わず、教授会に出席して各委員が独自の意見を述べ選考の参考とすることになった。2月25日の教授会では、選考委員よりの意見を聴取した後投票が行われ、最終的に寺松助教授が教授候補者として選ばれた。

寺松教授は、大正11年5月4日生れの岡山県人である。昭和21年京大医学部を卒業し、昭23年当時の京大結核研究所に入局以来ずっと胸部

外科学の研鑽をつづけて来られた。昭和29年前后数年間に、結核性空洞に対する直達開放療法を創始し、世に寺松の療法として知られるに至った。この治療法が、比較的手術侵襲の少い治療法であることから難治性の重症肺結核の治療に応用し得る特長があり、化学療法導入後の肺結核治療学に残された weak point をつく研究として注目された。

又実験的研究として、昭和30年前后より乾酪巣の軟化融解機転の化学的解明を志ざしこの研究の趣くところ、所謂肺結核の刺戟療法の開発に及んだ。

更に、肺移植を最終の目的とすると考えられる臓器移植免疫の基礎的研究が、最近の主なテーマの様である。この問題は免疫学の基礎を充分固めた上で応用に移る可きものであることは云うまでもないことで、いたずらに功を焦ることなく、しっかり土台を固めていただきたいと考える。